
最期に、キミと話してみたかったんだ。

志崎 遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最期に、キミと話してみたかったんだ。

【ZPDF】

Z7206P

【作者名】

志崎 遥

【あらすじ】

彼女に突然呼び出された、雪の降る夜。

俺は未だに、そのセリフの意味を計りかねている。

(前書き)

メリクリです畠山も
意味が分からぬと思つので、読むか読まないかは自己責任で！

「私、雪つて大嫌い」

寒空を見上げ、彼女は言った。
ゆつくりと雪を掬いとり、薄く笑う。

「突然、何」

「別に。ちょっと、思つただけ」

苦笑した顔が、何故だか印象的だった。

「だつて。寒いじゃない？」

手にした雪を見つめながら、少しだけ不愉快そうに顔をしかめる。
穏やかな気性の彼女がこんな些細なことで不愉快になるというのには
少しだけ意外だった。

「そりゃ、まあ、冬だしな」

答えると、その返事ではお気に召さなかつたのか、顔をしかめる。

「やつじやなくて。冷たいから、嫌いって口」

彼女は理解できないセリフを吐く。雪が冷たいのは当然だし、冷たいのが嫌いなら、わざわざ触らなければいいではないか？

そう言つと、彼女はますます眉間のしわを深め、ため息をつく。

「なんでわかんないかなあ？……もつといいや。キミにこんなこと話した私が馬鹿でしたー」

「そうだ。一番の疑問は、それだ。

「なんで俺にそんなこと話すんだよ」

俺と彼女は、別に仲が良いわけではない。むしろ彼女が俺の存在を知つてること自体が驚きだった。どうして俺を呼び出してまでこんな無益な話をしているのだろう。

彼女は社交的で人気があるから、わざわざ俺を呼ばなくとも他に呼べばすぐに来てくれる友人くらいいくつてもいるだろう。

「ん。なんでかな。キミなら、余計なこと言わないでくれそつだつたから。」

余計なことって、なんだよ。

そう言つそうになつたが、喉まで出かかつたところで押し込めた。それこそ、彼女の言つ“余計なこと”だらつ。

そこまで考えて、はたと氣づく。俺は、彼女に氣を遣つているのか？

いやいや、氣を遣うも何も、俺の性格でそれはないだろ。

自分の利己的な性格は、重々承知している。第一、それを言つなら彼女のセリフだつて、彼女の性格からは考えられない。自分の友達を、“余計なことを言つやつ”だと評価するなんて。

「私、ね。もうすぐいなくなるの」

少なくとも俺が知つてゐる限りでは情に熱いはずの彼女に、顔色一つ変えずにそう言われば、それはもう冗談としか思えなかつた。

しかし、次に出るはずの笑顔がない。おかしい。彼女なら、「冗

談だよ」と笑うはずなのに。

ならば「冗談では、ない?

ゆうくつと息を吐く彼女の顔を見つめればそこには、安堵の色が混じっていた。

「よかつた、キミに話して」

それは、“余計なこと”を口にしないから?

そう訊いてみたい気もしたが、残念ながら声が出ない。喉が渇いて仕方がない。

「聞いてくれてありがとうね。また会えたらい、なんかお礼するね。多分会えないだらうけど」

彼女はにこにこと笑いながら手を顔の横まで持ち上げ、控えめに振る。

俺はその笑顔に言い知れない不安を覚えたが、ついに背を向けた彼女に声をかけることはできなかつた。

最後のセリフ通り、以後俺が彼女と相見えることはなかつた。

(後書き)

読んでくださいありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7206p/>

最期に、キミと話してみたかったんだ。

2010年12月31日03時43分発行